地域の底力――岐阜県恵那市

ふるさとへの愛と誇りが導く岐阜県恵那市のまちづくり

地域を思う住人の心が一つにまとまれば、
まちの大きな活性化につながる……。
官民、地域、世代など垣根を超えた取り組みが、
岐阜県恵那市の各地で生まれ、
未来へと続く道を切り拓(ひら)いている。

大正時代、木曽川中流に完成した大井ダムにより生まれたダム湖を要とする「恵那峡」は、桜や紅葉の名所としても知られる恵那市の景勝地。大井ダムの建設は、福沢諭吉の娘婿で「電力王」とも呼ばれる福沢桃介によって主導された。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝

かつて織田家と武田家が覇権を争った岩村城跡。標高717メートルに立つ山城であり、2022年10月には第29回「全国山城サミット」が開催される。

地域の魅力を知ることがまちの活性化につながる

岐阜県南東部に位置する恵那市は人口約四万八〇〇〇人。愛知県名古屋市から車や電車で約一時間の距離ながら、景色の要ともいえる標高一一二八メートルの笠置山をはじめとして標高七〇〇～一〇〇〇メートル級の山々に囲まれた自然豊かな景色が広がる。

一九五四年、旧恵那郡の八つの町村（大井町、長島町、東野村、三郷村、武並村、笠置村、中野方村、飯地村）が合併し恵那市が誕生。二〇〇四年には、さらに五つの町村（山岡町、明智町、岩村町、上矢作町、串原村）も合併して現在の恵那市に至るが、平安時代の『延喜式』に「恵那」の名が記されているほど一帯の歴史は古くまで遡ることができる。

戦国時代には、長きにわたり織田信長と甲斐・武田家との係争地に。さらに明智町は明智光秀の出生地候補の一つとみなされており、江戸時代には中山道沿いにあったため栄えたと語るのは、市役所職員を経て二〇一六年から現職を務める市長の小坂喬峰氏だ。

現状、緩やかながらも人口が減少し、二〇六五年には半減すると推測される中、小坂氏はまちの活性化に向けて「誇り」「愛着」という言葉を掲げる。

「雇用や学ぶ場に限界があり、高校卒業後は進学、就職を含めて八割近くの子どもたちが地元を離れます。それでもなお恵那に愛着を持ち、先々は帰って暮らしたいと思ってもらうためには、地域を誇りに思えるブランドづくりが大切だと考えています」

ふるさとをもっと知ってもらおうとの思いから、市内全校で行われているのが「ふるさと教育」だ。江戸時代末期の儒学者・佐藤一斎、実践女子学園の創立者・下田歌子、一九二四年に日本初のダム式水力発電所を建設した福沢桃介らの偉業があらためて教育の場で語られている。

合併により力を合わせつつも、合併前の一三の町村が個性を失うことなく地域自治区として独自のまちづくりを行っているのも興味深い。

「サービスを含めて何もかも均一化されると、地域の魅力が薄れかねません。一三のまちにはそれぞれ、光る個性や誇るべきものがあるはず。土地に根付いた文化や歴史は住む人のアイデンティティーであり、また各地の独自性を残すことで互いを意識する競争が生まれ、市全体の元気につながるとも思っています」

とはいえ、住む人は往々にして

「ここで生まれ育ち、ずっと住み続けてきた僕自身が、恵那は誇るべきまちだと思っています。その思いを、市民の皆さんにも抱いていただきたい」と話す市長の小坂喬峰氏。手前は恵那市の公式キャラクター「エーナ」。

上／古い町並みが残る城下町の一角で醸される岩村醸造株式会社の「女城主」は、戦国時代の一時期、藩主亡き後に妻が城主を務めた歴史に由来。
右／五平餅は恵那をはじめ東美濃のソウルフード。

地元産の古代米、寒天、恵那山麓で寒天を食べて育った三浦豚、この３つの素材を使ったご当地グルメ「えなハヤシ」は、恵那出身でハヤシライスの考案者とされる早矢仕有的（はやしゆうてき）にちなむ。

上／寒暖差の大きい気候を生かした特産品で、日本一の生産量を誇る細寒天。煮詰めた天草を細長く切り、露天の棚に並べて干す。（写真提供：恵那市）
右／低カロリーが魅力の寒天ラーメンも販売されている。

地元の魅力に気づきにくいものだ。

「そういう意味では外から見た恵那市に対する評価もまた大切になってきますから、外部の方々と広くやり取りをし、お力を借りながらあらたなビジネス、まちづくりを進めているところです」

その一環として小坂氏は二〇一九年から、県や国の機関、民間企業での市職員の職場外研修や互いの出向を積極的に推し進めてきた。将来的には二〇二七年に東京～名古屋間で開業予定の、リニア中央新幹線への期待も大きい。隣接する中津川市に完成する岐阜県駅（仮称）の利用により、東京との移動が約一時間になると見込まれる。

「観光をはじめ各方面において、『リニア開業までに』という目標が生まれています。若い世代を含め、恵那を拠点にした多様な動きが出てきているのがうれしいですね」

官民の連携を広げる地域商社のチャレンジ

小坂氏が語るあらたな取り組みの背中を押す役割を担うのは、二〇二〇年一月に設立された一般社団法人ジバスクラム恵那。恵那市、恵那市観光協会が設立メンバーであり、業務を担う職員の中心は市役所関係者だ。牽引（けんいん）役のひとり、戸取健一郎氏は民間企業から恵那市役所へ出向しており、ジバスクラム恵那の業務執行理事を務める。

「ジバスクラム恵那の核は、観光業、農林業を中心とした地域産業の活性化。企業誘致、人材育成、商品開発支援、市内外とのビジネスマッチングなど、幅広い分野においてコーディネーター役となる地域商社です」

名称には市民を含む恵那市の地場全体がスクラムを組むとの思いが込められている。前例がないチャレンジだったため、最初に着手したのは独自の支援や取り組みを地域の人に理解してもらうための情報発信だったと戸取氏は話す。

「時間はかかるかもしれませんが、じっくり足固めをしていくことが次世代につながると思っています。市内外の方々から自由にご提案をいただき、将来的にはそこからあらたなビジネスにつながる化学反応が生まれる状況が理想です」

「情報発信が少しずつ実を結び、恵那山麓野菜の展開を手伝ってくれる方々が増えてきました」と喜ぶジバスクラム恵那・業務執行理事の戸取健一郎氏（左）。「ゼロからの取り組みなので苦労は少なくありませんが、失敗もまた教訓になっていますし、やりがいも感じています」とは、市役所から出向して農林関係の振興を担う横光哲氏（右）。

実店舗とオンラインで特産品を販売する「Aeru SHOP」とともに、ジバスクラム恵那の活動として前進しているのが「恵那山麓野菜」のブランド化だと話すのは、市役所から出向した農林担当の横光哲氏だ。

「農業に携わる方々や関係者がご自分で商品を開発し、市場を掘り起こすのは容易ではありません。その役割をわれわれが担い、生産を持続しながらきちんと生活できるように、安さではなく生産者の思いを反映した価格で販売していくのが一つの目標です。他には、このプロジェクトのメンバーが

JR恵那駅前にあるジバスクラム恵那の事務所１階に設けられた「Aeru SHOP」では、恵那山麓野菜をはじめとする上質な農産物や加工品が並ぶ。

左／2007年に岐阜県初の風力発電所として建設された「上矢作風力発電所」。右／道の駅「おばあちゃん市・山岡」では、直径24メートルの巨大な木製水車が景色を彩る。

所有する食品の加工所で廃棄処分の対象だった野菜を引き取り活用する、フードロスの削減も行われています」

山間に位置する恵那の農業は機械化や大規模展開が難しいものの、寒暖差のある気候などが幸いして多種多様な野菜がそろう。ブランド化の進展により地元の人々が少しずつ、あらためてそのおいしさを認識するようになる中、大手量販店との連携も始まった。

「取引を広げていくためには、参画する農家を増やしていかなくてはなりませんし、新規就農者への支援も必要になるでしょう。まだ道半ばですが、スピード感をもって動けるのが強み。運営のノウハウを蓄積しながら人を育て、あらたな雇用の場や流通の仕組みが地域に根づいていく将来を目指しています」

恵那市内にはキャンプ場やコテージ、ロッジなどが多く、利用者は毎年約五万人を数えることにも着目。二〇二二年四月には、ジバスクラム恵那と民間企業が連携したグランピング施設が誕生したと戸取氏は語る。

「バーベキューに恵那山麓野菜をはじめ地元の食材を提供し、後々の購入につながる流れをつくりたい。さらには、そのスキームを生かしながら複数の事業者と手を組んで展開できるかどうかが今後の課題です。地元のシェフとの食育関連ビジネスも企画が持ち上がっていますが、そういったこれまでにない仕組みづくりを重ね、循環させていきたいですね」

最先端技術と活力を過疎地に運ぶドローン事業

ジバスクラム恵那を介した恵那市との連携協定により、二〇二〇年七月から恵那市南東部の上矢作町を拠点として広くドローン事業を展開するのが株式会社ROBOZ（ロボッツ）だ。代表取締役の石田宏樹氏は、もともと出身地である岐阜県郡上市でビジネスを手掛けていたという。

「ここ数年、ドローンの存在は注目を浴びているものの都会では規制が厳しく、事業どころか興味のある人が体験や練習をすることすら難しい。しかしながらここでは市や地元の協力を得ているため、開発や実験を含めて自由に飛ばすことができるのが魅力です」

上矢作町は住民の高齢化に伴う過疎化が問題となっていたが、ドローンの体験会やスクールから、道の駅での販売、レースやショーといったイベント開催まで、関心を集める場が多彩に設けられ、恵那市内はもちろん県内外から多くの人が訪れるようになった。ふるさと納税の返礼品にも、ドローン体験が含まれている。加えて石田氏は、子どもたちの教育事業にも情熱を注ぐ。

「現在われわれは上矢作町の小中学校や近隣の高校で、ドローンICTというプログラミングの授業を行っています。子どもたちが自分で動きをプログラミングするだけではなく、それに応じて実際にドローンを飛ばしてミッションのクリアを競うレースも行うので

「地域活性化のためにドローンでなにができるかと子どもたちに問うと、思いがけないアイデアが出てきます。そのような時間を楽しく感じています」と話す小中学校、高校でドローンの授業を担うROBOZ代表取締役の石田宏樹氏。

上／ROBOZが行う体験プログラムには、市内外から多くの人が集まり、子どもたちにも人気が高い。（写真提供：株式会社ROBOZ）

左／道の駅「上矢作ラ・フォーレ福寿の里」では、各種ドローンをも取り扱う。

上／明智町の「大正ロマン館」では、この地で生まれたという説がある明智光秀に関する展示も見られる。
下／2019年から開催されている「恵那市公式Instagramフォトコンテスト」には、市内外から数多くの応募が寄せられる。写真は串原木根地区の「きねしだれ桃園」で撮影された第1回の入賞作品。（写真提供：恵那市）

すが、画面上だけで完結せず、成果をリアルに体験できるので盛り上がりますね」

高齢化が進む状況をふまえ、食料や薬といった生活必需品を運ぶドローンの物流サービスの実証実験も始まった。また、災害対策、農業の負担を軽減する農薬散布や獣害対策など、地域への貢献が考えられたROBOZの事業構想は実に幅広い。ドローンが飛ぶ空は、無限の可能性を秘めていると石田氏は期待をよせる。

「サービスが広がればやがて、プロフェッショナルなパイロットのニーズなど雇用の場も広がるでしょう。ドローンのまち上矢作、恵那と呼ばれ、その先進地であるここで暮らしたいと思う人が増える未来を思い描いています」

映画製作に込められた恵那が一つにという思い

あらたな取り組みに限らず、地域への思いは時間をかけて恵那市で開花してきた。その一つが映画『ふるさとがえり』だ。この作品は恵那市の有志が中心となった「えな『心の合併』プロジェクト」により、二〇一一年に完成。恵那を舞台とし、地域の人々が担う消防団の活動を軸に、人のつながりや時にその絆の強さから生じるジレンマが、豊かな自然の風景とともに描かれている。

プロジェクトの立案から携わってきた、株式会社ゼロワンカンパニー代表の小板潤治氏が当時を振り返る。

「二〇〇四年の合併後、それぞれに文化が異なる一三の地域が心を一つにするためになにかできないかと考えていたとき、映画製作による地域活性化に取り組む林弘樹監督の活動を知りました。恵那は司葉子さんが出演した一九五七年版『青い山脈』のロケ地で、われわれのおやじ世代が頑張ってそれを支えたと聞いていたこともあり、話が盛り上がったわけです」

小板氏らは協力者や資金集め、住民の理解を得るために奔走し、最終的には関連イベントなどを含めて数千人の市民が関わった。製作から一〇年が過ぎた今も広く上映会が行われ、全国四七都道府県での開催は千回を超える。

「正直なところ、映画の完成により劇的にまちが変わったわけではありません。ただ、かつては何かする際に上の世代にお伺いを立てるという縦のつながりが強固でした。しかし、若い世代が動いたことでその垣根が少しずつ取り払われていったように思います」

「映画の製作においては、自分たちのふるさとは自分たちで守るということがテーマだったこともあり、消防団の活動に焦点をあてました」と語る、ゼロワンカンパニー代表の小板潤治氏（右）。恵那峡映画祭実行委員長の西尾巌太氏（左）の本職は、恵那市農政課職員。食文化の掘り起こしなど業務ともリンクさせながら、地元の人が楽しめる映画祭にしていきたいという。

渋江譲二、佐藤仁美が主演を担った映画『ふるさとがえり』は、笑福亭鶴光、斎藤洋介、村田雄浩、高畑淳子らベテラン陣が脇をかためた。脚本の栗山宗大氏は、三カ月ほど恵那に滞在して作品づくりに臨んだという。

加えて、この映画製作と並行して映画をもっと知ろうという機運が高まり、映画塾やショートムービーコンテストの開催へとつながる。「『青い山の麓』ENAショートムービーコンテスト」から始まり、「恵那峡映画祭」と名称を変えて二〇二二年には一三回目を迎

コロナ禍以前に行われた第1回恵那峡映画祭の授賞式の様子。
（写真提供：恵那峡映画祭実行委員会）

恵那駅～明智駅（写真）を結ぶ明知鉄道では、リニア中央新幹線開業に合わせてSLの走行が計画されている。

えると話すのは、恵那峡映画祭実行委員長の西尾巌太氏だ。

「首都圏を含め、短編映画部門は毎回平均して三〇件ほどの応募があります。二〇二一年からはシナリオ部門を設けたのですが、岐阜県外からだけでも約三〇〇件の応募があり驚きました。シナリオを書く際には恵那について調べる方が多いとも聞き、まちを知ってもらう機会になっているのがうれしいですね。一方で、地元からの応募が思うように増えていないのが課題です」

少しずつ地元の高校生がワークショップに参加したり、作品を応募したりという流れができつつあったものの、コロナ禍のため人が集まるようなイベントは避ける必要があり、道が閉ざされていると西尾氏は話す。

「収束後、ふたたび映画祭に関心をもってもらえれば、子どもたちが恵那の良さに気づくきっかけにもなるでしょう。より多くの方々に恵那や映画祭に関わっていただくために、開催時期の調整や観光と絡めた宣伝も今後進めていく予定です」

若い移住者を呼び寄せた空き家の再生活動

小さな尽力の積み重ねが地域の暮らしを大きく変えた、恵那市南東部に位置する串原の状況も全国から注目を浴びている。その中心人物、奥矢作移住定住促進協議会会長の大島光利氏が立ち上がった発端は、合併前の二〇〇〇年に一帯を襲った東海豪雨災害（恵南豪雨災害）だった。

当時、恵南消防組合消防本部消防長を務めていた大島氏は独自に調査を進め、林業の衰退により山が守られていないことが甚大な被害の要因だと気づく。退職後の二〇〇六年、大島氏はNPO法人奥矢作森林塾を立ち上げ、市内外の約三〇名が森の再生に力を注ぐようになった。

「山の手入れをしなければ、また大きな災害が起きる。過疎化が進む中、意欲のある若い人に来てもらい地域を元気にする必要があると考え、『みんなでやろまいか』（岐阜県の方言で「みんなでやろう」という意味）というキャッチフレーズを掲げて仲間を募りました」

その頃の串原では住む人がいないまま朽ちていく空き家も目立ち、大島氏は地域を蘇らせるためにその調査をも手掛けるようにとはいえ持ち主の行方が分からないケースが多く、大島氏は仲間とともに東京から大阪まで親戚などをたどって歩いたという。

紆余曲折を経て、「リフォーム塾」という形を取りながら最初の古民家復活が進められたのをきっかけに、口コミで田舎暮らしを望む移住希望者が増え続け、権利関係がクリアになった空き家のリフォームが重ねられてきた。その結果、二〇二一年までに三〇軒の古民家が息を吹き返し、八一人が

奥矢作移住定住促進協議会の取り組みが農林水産省の「ディスカバー農山漁村（むら）の宝」に認定され、奥矢作森林塾が総務省の「ふるさとづくり大賞」を受賞するなど、大島光利氏が積み重ねてきた活動は多方面から評価されている。

奥矢作移住定住促進協議会や奥矢作森林塾の拠点であり、最初に古民家リフォームが手掛けられた「くしはら田舎暮らし体験館　結の炭家」では、囲炉裏を囲んでの集いやイベントが行われている。

道中に偶然、ニホンカモシカを見かけたほど、串原は豊かな自然に恵まれたエリア。

東濃や中濃、飛騨地方を中心に昔から伝わる朴葉（ほおば）寿司の伝統を守ろうと、2020年に市民グループ「恵那の朴葉寿司プロジェクト」が発足。2021年からは初夏のイベントとして、市内の複数店舗などが朴葉寿司を持ち寄る「朴葉寿司まつり」が恵那市と連携して開催されている。恵那市の「朴葉の食文化」は、文化庁が食文化の継承・振興のために認定する「100年フード」の一つ。（写真提供：恵那市）

移住。空き家は四軒まで減少した。その流れを支えてきたのは、契約書の作成ほか登記に必要な複雑な手続きを大島氏が担ったことにある。

「費用対効果を言い出したら、何もできません。誰かが動かなければならない。そう思いながら一〇〇％ボランティアで進めてきたのは、この地域が消滅するのではないかという危機感があったからです」

大島氏の苦労が実り、国や市の協力を得て二〇一一年に奥矢作移住定住促進協議会が発足。地域を離れる人から、家のその後を託されるようにもなったという。

「現在の串原は移住者が約一五％を占め、森林塾をはじめ移住してきた若者たちがリーダーを務めるようになりました。新規で農業、林業に取り組む人もいます。もとから住む人が、誰が来てもウエルカムだったのにも助けられました。今後は、子どもの数が増えるといいですね。ここをふるさととして生まれ、育ち、成長してまた帰ってきてくれることを願っています」

街道の行き来が育んだ恵那の人の懐の深さ

「恵那は人がいい」

各地を歩く中、幾度となく聞いた言葉だ。その気質について、市長の小坂氏はこう語る。

「恵那の人たちは、穏やかで優しく寛容だと昔から言われており、私自身もそれを実感しています。江戸時代の中山道、奈良時代まで遡れば東山道と、恵那は何百年も昔から街道の拠点の一つでした。人や情報が行き来する中での営みにより、独自のマインドが育まれてきたのかもしれません」

二〇二一年には、第五回目となる女性ドライバーによる「WOMEN'S RALLY in 恵那2021 & MASC RALLY 2021」が開催された。そして、二〇二二年十一月には隣接する中津川市ほか愛知県内三市とともに、恵那市の公道が「FIA世界ラリー選手権 フォーラムエイト・ラリージャパン2022」の舞台となる。コロナ禍のため延期されてきたイベントだが、無事に開催されれば、地元の道を車が疾走する姿が、世代を超えて住む人の記憶に鮮やかに刻まれ、ふるさとを離れた人もその様子を輝かしく思うことだろう。国内外から関係者や観客が訪れるそのイベントの継続は、広く恵那を好きになってもらういい機会にもなるのではないかと、小坂氏は笑顔を見せた。

2021年12月に2日間にわたり開催され、39台がエントリーした「WOMEN'S RALLY in 恵那 2021 & MASC RALLY 2021」。日本で唯一の女性ドライバーによるラリーとして注目を浴びているこのラリーは2021年で第5回目を数える。（写真提供：恵那市）

そして、未来。リニアという新しい道が首都圏とつながり、ドローンが空の道を自在に広げているであろう頃、恵那の人の心には、さらなる地域への思いが芽生えているに違いない。

日本の棚田百選に認定された、中野方町坂折地区に広がる棚田。